

兵庫県立大学第1期中期計画
業務実績に関する評価報告書

平成19年3月

兵庫県立大学評価委員会

目 次

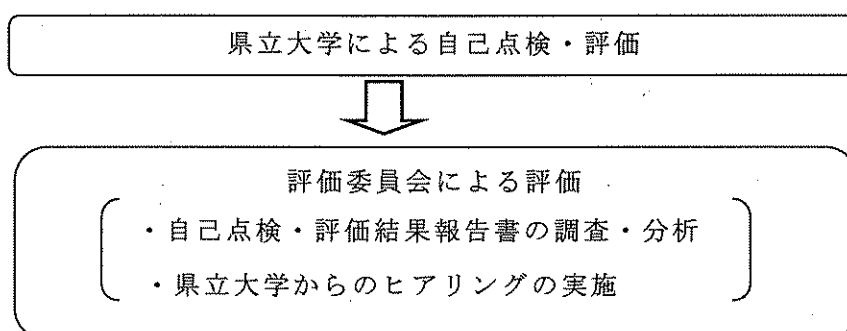
1. 評価の考え方	
(1) 評価の方法	2
(2) 評価の視点	3
2. 全体評価	
(1) 評価結果と判断理由	4
(2) 今後への期待	5
3. 項目別評価	
3-1. 先導的・独創的な研究の推進	7
3-2. 創造力と活力を有する人材の育成	10
3-3. 地域社会や国際社会の発展への貢献	14
3-4. 大学運営における自主性・自律性の確立	17
3-5. 3大学統合によるメリットの発揮と課題の解消	20
3-6. 大学情報の積極的な公開・提供及び広報の充実	22
(参考-1) 兵庫県立大学評価委員会名簿	24
(参考-2) 委員会の開催経過	24

1. 評価の考え方

兵庫県立大学評価委員会（以下、「評価委員会」という。）は、兵庫県立大学の設置及び管理に関する条例第15条に基づき、兵庫県立大学（以下、「県立大学」という。）の第1期中期計画（以下、「中期計画」という。）期間中（平成16年度～18年度）の業務実績に関する評価を行った。

(1) 評価の方法

評価委員会は、県立大学による自己点検・評価結果の調査分析及び県立大学からのヒアリングの実施により、客観的な立場から、中期計画の項目別評価（小項目及び大項目）及び全体評価を行った。



① 項目別評価

7) 小項目

中期計画に掲げられた193の小項目ごとに、自己評価や計画設定の妥当性を総合的に検証し、計画の実施状況について、下記の4段階による評価を行った。

区分	達成度	判断の考え方
Ⅳ	計画を上回って実施している	達成時期・内容において計画を上回って実施していると判断される場合。
Ⅲ	計画を順調に実施している	計画のとおり実施中であると判断される場合。
Ⅱ	計画を十分に実施できていない	取組状況に改善すべきところがあり、計画の達成状況が不十分であると判断される場合。
Ⅰ	計画を実施していない	計画を実施していない場合。

1) 大項目

中期計画の6つの大項目ごとに、小項目評価結果を基にしつつ小項目の重要性を総合的に考慮し、下記の5段階で評価するとともに、記述により概括した。

区分	達成度	判断の考え方	基準
S	特筆すべき進捗状況	計画を上回って実施されている場合。	委員会が特に認める場合
A	計画どおり	計画どおり実施されている場合。	すべてⅢ・Ⅳ
B	おおむね計画どおり	おおむね計画どおり実施されている場合。	Ⅲ・Ⅳが8割以上
C	やや遅れている	やや遅れている場合。	Ⅲ・Ⅳが8割未満
D	重大な改善事項あり	特に重大な改善事項がある場合。	委員会が特に認める場合

② 全体評価

項目別評価（小項目及び大項目）の結果を踏まえ、教育、研究、社会貢献など業務全体にわたる横断的な観点から、県立大学の業務の実績について記述により評価した。

(2) 評価の視点

評価委員会は、以下の視点で評価を行った。

- ① 県立大学の業務運営について多角的な観点から総合的な評価を行い、改善すべき点を明らかにするとともに、その計画的な運営に関して必要と認める事項についての建議を行うこと。
- ② 県立大学の統合・改革の取組みを重点的に評価し、これを支援すること。
- ③ 教育・研究に加え、地域とともに発展する県立大学として推進している地域社会や国際社会への貢献を積極的に評価すること。
- ④ 学長のリーダーシップの下で推進している機動的・戦略的・効率的な大学運営を目指した取組みや、県民に支えられる県立大学として県民や社会への説明責任を重視し、開かれた大学運営を目指した取組みを評価すること。

2. 全体評価

(1) 評価結果と判断理由

- 項目別評価（下表）の大項目のうち、「Ⅰ 先導的・独創的な研究の推進」及び「Ⅲ 地域社会や国際社会の発展への貢献」の2つの項目についてはA評価（「計画どおり」）、「Ⅱ 創造力と活力を有する人材の育成」についてはB評価（「おおむね計画どおり」）、「Ⅳ 大学運営における自主性・自律性の確立」、「Ⅴ 3大学統合によるメリットの発揮と課題の解消」及び「Ⅵ 大学情報の積極的な公開・提供及び広報の充実」の3つの項目についてはC評価（「やや遅れている」）と判断した。
- 個別の事業については、次ページの<特筆すべき取組み>に示したように、中型放射光施設「ニュースバル」を活用した研究の高度化、全国初の看護学に関する研究所「地域ケア開発研究所」の開設、全学共通教育の東西2箇所での集約実施、生徒の個性や才能を伸ばす「中高一貫教育」を実施する附属中学校の開校、産学連携センター設置による全県的な産学連携の推進や外部資金の積極的な獲得、学長のリーダーシップを生かした機動的・戦略的な大学運営の取組みなど、特に評価できる項目がある一方、研究者データベースや教員評価システムの構築の遅れなど課題も見受けられた。
- これらのことを総合的に考慮し、中期計画業務実績については、「全体としておおむね計画どおり実施している」と評価した。

Ⅰ. 先導的・独創的な研究の推進(7ページ)	S 特筆すべき進捗状況	A 計画どおり	B おおむね計画どおり	C やや遅れている	D 重大な改善事項あり
Ⅱ. 創造力と活力を有する人材の育成(10ページ)	S 特筆すべき進捗状況	A 計画どおり	B おおむね計画どおり	C やや遅れている	D 重大な改善事項あり
Ⅲ. 地域社会や国際社会の発展への貢献(14ページ)	S 特筆すべき進捗状況	A 計画どおり	B おおむね計画どおり	C やや遅れている	D 重大な改善事項あり
Ⅳ. 大学運営における自主性・自律性の確立(17ページ)	S 特筆すべき進捗状況	A 計画どおり	B おおむね計画どおり	C やや遅れている	D 重大な改善事項あり
Ⅴ. 3大学統合によるメリットの発揮と課題の解消(20ページ)	S 特筆すべき進捗状況	A 計画どおり	B おおむね計画どおり	C やや遅れている	D 重大な改善事項あり
Ⅵ. 大学情報の積極的な公開・提供及び広報の充実(22ページ)	S 特筆すべき進捗状況	A 計画どおり	B おおむね計画どおり	C やや遅れている	D 重大な改善事項あり

総合的に
考慮して

「全体としておおむね計画どおり実施している」

(2) 今後への期待

- ① それぞれに歴史・伝統を有する3大学を統合し、21世紀にふさわしい県立大学構築の基礎を確立するため、開学当初の3年間における大学運営のあり方を定めた中期計画に基づき、さまざまな業務に意欲的に取り組むとともに、そのための制度やシステムの導入も図るなど、積極的な姿勢が見受けられた。
- ② 先導的な研究の推進や、公立大学としての使命の一つである社会貢献への取り組みなどは高く評価できるが、老朽化した姫路書写キャンパスについては一定の施設水準の確保が望まれることなど課題も残されている。
- ③ 大学統合の効果については、全学共通教育の充実や部局横断的な共同研究の推進など既に効果が発揮されつつあるものも見受けられるが、全学的な就職支援体制の確立や事務職員の専門性の向上などその効果が現れるのにはなお時間を要するものもあり、今後とも必要な資源と学生を含む人材確保に努め、第2期中期計画における取り組みに期待したい。
- ④ 第2期中期計画の策定に当たっては、明確な目標・目的と達成年次の設定など、より定量的な指標を用いることにより、魅力ある実現可能な計画とされることを期待したい。

<特筆すべき取り組み>

項目別評価の結果をもとに、特筆すべき取り組みについて、次のとおり確認した。

- ・ 文部科学省の21世紀COEプログラムについて、生命理学研究科及び看護学研究科において採択を受け、両テーマとも中間評価で5段階のB評価を得るなど順調に実施している。
- ・ 中型放射光施設「ニュースバル」等県立大学の有する研究基盤を活用し、材料解析研究の展開等研究の高度化を図った。共同研究等の件数も順調に増加してきており、今後、材料分析用ビームラインの新たな設置も検討している。
- ・ 看護学に関する研究所として全国初の「地域ケア開発研究所」を開設し、地域の住民を対象に様々な問題を身近な看護職に相談できる「まちの保健室」等の活動を関係機関とともに展開し、地域における保健活動の向上と研究を行った。
- ・ 総合教育センターが中核となって、全学共通教育の東西2箇所での集約実施、遠隔授業システムによる他専攻科目の開講等全学共通教育の充実に加え、教員相互による授業参観や意見交換会など全学的なFD (Faculty Development) を実施しており、FDが教育・研究と自律的な大学運営を創造する拠点となることが期待できる。
- ・ 附属高校におけるこれまでの教育実績を踏まえつつ、今後さらに、ゆとりのある学校生活の中で6年間の計画的・継続的な教育指導を展開し、生徒の

個性や才能を伸ばす「中高一貫教育」の導入について、調査・検討し、周辺への理解など多くの課題を克服し、平成19年4月に附属中学校を開校することとなった。

- ・ 産学連携センターの企画調整機能の向上、市町・経済団体等との連携協定の締結、コーディネーターによる企業訪問等の活動など全体的に産学連携の推進を図るとともに、外部資金の受入れ件数も増加している。
- ・ 学長のリーダーシップの下で、機動的・戦略的な企画立案機能を強化し、大学運営の基本的方向について協議するため、「学長・副学長会議」を開催するとともに、学長の指示に基づき重大な課題に対応する「学長特別補佐」を設置し、「共通教育の充実」プロジェクトチーム、「学歌制作委員会」を運営した。
- ・ 学外有識者が過半数を超える「運営協議会」など学内審議機関の適切な運営により、社会の意見を大学運営に反映させるとともに、戦略的かつ円滑な意思形成を図った。
- ・ 研究者データベースをインターネット上で公開しており、継続的に内容の充実に努めているが、18年度現在で登録率は87%（17年度：75%）にとどまっている。
- ・ 教員の評価システムの先行事例を調査・情報収集しているが、今のところ大学全体としての教員評価システムは確立していない。

（参考）小項目評価結果の総括表

	評価の対象項目数	I 実施していない	II 十分に実施できていない	III 順調に実施している	IV 上回って実施している
I. 先導的・独創的な研究の推進	27	0 (0%)	4 (15%)	20 (74%)	3 (11%)
II. 創造力と活力を有する人材の育成	63	0 (0%)	10 (16%)	48 (76%)	5 (8%)
III. 地域社会や国際社会の発展への貢献	32	0 (0%)	3 (9%)	27 (84%)	2 (6%)
IV. 大学運営における自主性・自律性の確立	53	0 (0%)	12 (23%)	41 (77%)	0 (0%)
V. 3大学統合によるメリットの発揮と課題の解消	14	0 (0%)	4 (29%)	10 (71%)	0 (0%)
VI. 大学情報の積極的な公開・提供及び広報の充実	4	0 (0%)	1 (25%)	3 (75%)	0 (0%)
合計	193	0 (0%)	34 (18%)	149 (77%)	10 (5%)

3. 項目別評価

3-1. 先導的・独創的な研究の推進

(1) 評価結果と判断理由

	評価の対象 項目数	I 実施してい ない	II 十分に実施で きていない	III 順調に実施 している	IV 上回って実 施している
1 各分野における研 究の高度化・重点化	7	0	1	5	1
2 学内外における共 同研究の推進	8	0	1	7	0
3 新たな研究拠点の 整備・充実	6	0	1	3	2
4 外部研究資金の確 保	6	0	1	5	0
合 計	27	0 (0%)	4 (15%)	20 (74%)	3 (11%)

85%

○ 小項目評価の集計結果では、27項目のうち23項目がⅢ又はⅣに該当しており、8割以上を占めることから、B評価（「おおむね計画どおり」）となるが、次ページの<特筆すべき小項目評価>に示したように、中型放射光施設「ニュースバル」等県立大学の有する研究基盤を活用し研究の高度化を図っているほか、看護学に関する本格研究機関としては全国初の「地域ケア開発研究所」を開設し、地域における保健活動の向上と研究を行っていることなどは高く評価できる。

また、生命理学研究科及び看護学研究科において21世紀COEプログラムに採択されており、公立大学で複数採択を受けているのは2大学だけであったことや、領域を越えた部局横断的な共同研究が推進されていることも評価できる。

○ 以上のことを総合的に考慮し、大項目評価としては、A評価（「計画どおり」）が妥当であると判断した。

I. 先導的・独創的な研 究の推進	S 特筆すべき 進捗状況	A 計画どおり	B おおむね 計画どおり	C やや遅れて いる	D 重大な改善 事項あり
----------------------	--------------------	------------	--------------------	------------------	--------------------

<特筆すべき小項目評価>

① 小項目評価がⅣ（計画を上回って実施している）の項目は次のとおり。

（Ⅰ-1-5）「ニューズバル」等の研究基盤を活かした研究の高度化

中型放射光施設と8本のビームラインを運用し、微細加工分野を中心に高度な研究を行っているほか、共同研究等の件数も順調に増加し、更に材料分析用ビームラインの新たな設置も検討して、地域における先端的科学研究拠点作りに貢献しており、計画を上回っていると評価した。

（Ⅰ-3-1）地域ケア開発研究所の開設

16年度に看護学に関する本格研究機関としては全国初の「地域ケア開発研究所」を設置し、アジアの災害に対する調査・支援等を展開し、災害看護ネットワークを確立するとともに、地域の住民を対象に様々な問題を身近な看護職に相談できる「まちの保健室」等の活動を関係機関とともに展開し、地域における保健活動の向上と研究を行うことによって、公立大学としての存在意義を高めており、計画を上回っていると評価した。

（Ⅰ-3-6）自然・環境科学研究所の部門（森林・動物系）増設

人と野生動物との調和のとれた共生社会の実現を目指し、野生動物の科学的・計画的な保護管理に資するとともに、公立大学としての特色ある総合的・学際的な調査及び研究を行うため、19年4月開設に向け、教員の採用等準備を進めており、計画を上回っていると評価した。

② 小項目評価がⅢ（順調に実施している）のうち、特に考慮すべき項目は次のとおり。

（Ⅰ-1-1）21世紀COEプログラム採択研究をはじめとした高度な研究の推進

現在、生命理学研究科及び看護学研究科が21世紀COEプログラムに採択されており、両テーマとも、プロジェクトチームを設置するなど研究科・研究所を挙げて支援体制を構築しており、また生命科学研究科では大規模ラマン分光測定システムを整備する等次期COEプログラムに向けた取組みも推進しており、計画を順調に実施していると評価した。

（Ⅰ-2-1）部局横断的な共同研究の推進

共同研究を促進するため、県立大学特別教育研究助成金に部局横断的な共同研究のメニューを設けるとともに、研究成果を学内で共有し、部局間の連携と教育・研究の活性化に資することを目的とした研究発表会を年1回開催しており、計画を順調に実施していると評価した。

- ③ 小項目評価がⅡ（計画を十分に実施できていない）の項目は次のとおり（主なもの）。

（I-2-（8））研究者データベースの構築

職歴・専門分野・論文等を搭載した研究者データベースは、教員評価の基礎となる情報であり、また情報公開、産学連携の面からも重要であるが、18年度の登録率は87%（17年度：75%）にとどまっており、未登録教員がいることから、計画を十分に実施できていないと評価した。

（I-4-（1））科学研究費補助金申請率の目標（85%）達成

申請率は順調に伸びているものの、18年度における申請率は全体として77.4%であり、12部局中6部局が目標の85%を達成していないため、計画を十分に実施できていないと評価した。

（2）評価にあたっての意見、指摘等

- ① 21世紀COEプログラムについては、世界最先端の研究を更に進めることが期待されており、引き続き、次期COEプログラムについても申請することが望ましい。
- ② 研究者データベースについては、自己申告をベースとしつつも、申告のルールを作り、登録率が100%となることを強く期待する。
- ③ 科学研究費補助金申請率については、今後、全学部が目標の85%達成に向けて努力することを期待する。

3-2. 創造力と活力を有する人材の育成

(1) 評価結果と判断理由

	評価の対象 項目数	I 実施してい ない	II 十分に実施で きていない	III 順調に実施 している	IV 上回って実 施している
1 全学共通教育の充 実	8	0	1	7	0
2 社会ニーズに対応 した専門教育の展開	13	0	2	9	2
3 積極的な大学教育 改革の推進	8	0	2	6	0
4 遠隔授業の円滑な 運営	2	0	0	2	0
5 学術情報館のサー ビスの充実	5	0	0	4	1
6 入学者受入れ	6	0	2	4	0
7 学生生活支援	18	0	3	14	1
8 附属高校における 教育の充実	3	0	0	2	1
合 計	63	0	10	48	5
		(0%)	(16%)	(76%)	(8%)

84%

○ 小項目評価の集計結果では、63項目のうち53項目がⅢ又はⅣに該当しており、8割以上を占めることから、B評価（「おおむね計画どおり」）であり、次ページの<特筆すべき小項目評価>に示したように、ユニークな地域連携教育、インターシップ等の実践・体験型教育の積極的な活用のほか、「中高一貫教育」を実施する附属中学校の開校、全学共通教育の充実などは高く評価できるが、全学的な就職支援体制や卒業生データベースの整備など十分に実施できていない項目も見受けられた。

○ 以上のことを総合的に考慮し、大項目評価としては、B評価（「おおむね計画どおり」）が妥当であると判断した。

II. 創造力と活力を有する人材の育成	S 特筆すべき 進捗状況	A 計画どおり	B おおむね 計画どおり	C やや遅れて いる	D 重大な改善 事項あり
---------------------	--------------------	------------	--------------------	------------------	--------------------

<特筆すべき小項目評価>

- ① 小項目評価がⅣ（計画を上回って実施している）の項目は次のとおり（主なもの）。

（Ⅱ-2-(5)）地域連携教育、インターンシップ等の実践・体験型教育の活用
インターンシップ、地域の子育て支援などに加え、文部科学省事業の採択や公立大学の特色を生かして自治体との連携など特徴ある取組みを行っており、計画を上回って実施していると評価した。

（Ⅱ-2-(9)）大学院「環境人間学研究科共生博物部門」の設置構想の推進
平成19年4月に環境人間学研究科に共生博物部門を設置しフィールド重視の実践的研究を行うこととしており、自然・環境に資する人材の育成などが期待されるため、計画を上回って実施していると評価した。

（Ⅱ-5-(2)）図書館システムの統合による利用者サービスの向上
計画内容の実施により他キャンパスからの利用冊数が増加していることに加え、近隣住民の利用拡大にも努めており、計画を上回って実施していると評価した。

（Ⅱ-8-(3)）中高一貫教育の検討
附属中学校については、多くの課題があるなか、16年度に基本構想、17年度に基本計画を策定し、18年度は教育課程の検討・学校説明会の開催・入学者選考など、平成19年4月開校に向け、準備を進めており、計画を上回って実施していると評価した。

（参考）入学者選考の状況：志願者数 400 名、受験者数 368 名、合格者数 40 名

- ② 小項目評価がⅢ（順調に実施している）のうち、特に考慮すべき項目は次のとおり。

（Ⅱ-1-(8)）総合教育センターの運営による全学共通教育の質の向上
総合教育センターが中核となって、総合教育推進委員会の下で全学共通教育及び教育改革の審議、全学共通科目の選定等の検討を行うほか、教員相互による授業参観や意見交換会を実施している。また、授業評価アンケートや学生生活実態調査の結果を踏まえ、完成年次以降の全学共通教育の充実に向けた検討を行っており、計画を順調に実施していると評価した。

(Ⅱ-2-(8)) 専門職大学院の設置検討

「会計専門職大学院」については、西日本の国公立大学初の会計専門職大学院として平成19年4月開設を目指し、平成18年12月に推薦入試、19年1月及び3月に一般入試を行うなど準備を順調に行っており、計画を順調に実施していると評価した。

また、「景観園芸専門職大学院（仮称）」についても具体的な検討が進んでいる。

なお、「看護学専門職大学院（仮称）」及び「高度医療理工専門職大学院（仮称）」については、既存の大学院研究科の充実による高度専門職業人の育成、費用対効果の理由から断念するものであり、やむを得ない。

(Ⅱ-3-(1)) 学生による授業評価アンケートの実施

授業評価アンケートを、全開講科目を対象に全学的に行っており、計画を順調に実施していると評価した。

(Ⅱ-6-(3)) AO（アドミッションオフィス）入試の実施

AO入試については、平成17年度（平成18年度入試）から全学部で導入しており、計画を順調に実施していると評価した。

(Ⅱ-7-(6)) セクシュアルハラスメント・アカデミックハラスメントに関するガイドラインの策定

平成17年3月にハラスメントに関するガイドラインを策定しており、計画を順調に実施していると評価した。また、平成18年5月に策定した「兵庫県立大学研究倫理指針」は、研究者が研究を遂行する上で遵守すべき規準を定めており、先進的なものとして評価できる。

③ 小項目評価がⅡ（計画を十分に実施できていない）の項目は次のとおり（主なもの）。

(Ⅱ-6-(6)) 入試ミスの防止

18年度及び19年度入試においてもミスが発生しており、十分に実施できていないと評価した。

(Ⅱ-7-(10)) 全学的な就職支援体制の構築

学部の特徴によって就職の状況が異なることから、各キャンパスにおいて、就職説明会等を実施しているほか、就職関連雑誌等に県立大学を紹介する記事を掲載するなど、業界に対する教育理念等の発信にも努めている。

ただし、全学的な就職支援体制については、十分に実施できていないと評価した。

(Ⅱ-7-(15)) 卒業生データベースの整備

卒業生と大学との継続的な交流・連携のための卒業生データベースの整備については、検討が不十分であり、十分に実施できていないと評価した。

(2) 評価にあたっての意見、指摘等

- ① 学生による授業評価アンケートについて、今後は、アンケート結果を受けて、FDをベースに授業内容の着実な改善とそのフォローアップを十分に行うことを期待する。また、カリキュラムの改善への反映はもちろんのこと、学生自身の教科やゼミの選択の機会としての活用も期待する。
- ② 書写キャンパスは老朽化が際立っており、理工系の他大学の状況も考えると一定の施設水準の確保が必要である。
- ③ ハラスメント対策に関するガイドラインについては、一層周知し、人権意識の徹底を図ることを期待する。
- ④ 入試ミスについては、発生原因の分析及び再発の防止に努めることを期待する。特に、事前チェックのマニュアルだけでなく、直後に回答分布を見るなどの事後チェックのマニュアルも大事である。
- ⑤ 就職支援については、キャリア教育や進路指導など、個別のキャンパス毎はよくできているが、全学的な支援はまだ十分にできていないので、今後、「就職支援センター（仮称）」の設置、同窓会や卒業生との連携の強化により、更なる充実を図ることを期待する。
- ⑥ 卒業生データベースについては、卒業生の率直な意見を大学の教育・研究活動へ反映させるとともに、大学への協力と支援を得るという観点から必要であり、ネットワークの活用方法、整備手法を含め検討することを期待する。

3-3. 地域社会や国際社会の発展への貢献

(1) 評価結果と判断理由

	評価の対象 項目数	I 実施してい ない	II 十分に実施で きていない	III 順調に実施 している	IV 上回って実 施している
1 地域社会との交 流・連携	12	0	1	11	0
2 地域産業との交 流・連携	9	0	1	6	2
3 国際交流の推進	11	0	1	10	0
合 計	32	0	3	27	2
		(0%)	(9%)	(84%)	(6%)

90%

- 小項目評価の集計結果では、32項目のうち29項目がⅢ又はⅣに該当しており、8割以上を占めることから、B評価（「おおむね計画どおり」）となるが、次ページの〈特筆すべき小項目評価〉に示したように、産学連携については、公立大学の特色を生かして全県を対象とする産学連携センターの開設や、市町、経済団体等との連携協定の締結、知的財産本部の設置とともに、外部資金の受入れ件数の増加など、高く評価できる。

また、生涯学習については、生涯学習センターを中心に、各部局の特色を生かした魅力あるプログラムを提供しており、特に丹波・但馬地域における特別公開講座の実施や、一般県民にもわかりやすいテーマを対象とした「知の創造シリーズ」フォーラムの開催などは評価できる。

国際交流についても、14大学1研究所と学術協定を締結するなど、国際交流センターと各部局が連携し、国際的な学術交流、教員交流、学生交流、留学生の受入を促進し、国際化を推進していることは評価できる。

- 以上のことを総合的に考慮し、大項目評価としては、A評価（「計画どおり」）が妥当であると判断した。

	S	A	B	C	D
Ⅲ. 地域社会や国際社会 の発展への貢献	特筆すべき 進捗状況	計画どおり	おおむね 計画どおり	やや遅れて いる	重大な改善 事項あり

<特筆すべき小項目評価>

① 小項目評価がⅣ（計画を上回って実施している）の項目は次のとおり。

（Ⅲ-2-(1)）産学連携センターによる大学と産業界の交流、研究成果の還元
市町・経済団体との連携協定、コーディネーターの活用、知的財産本部の設置など広範に産学連携活動を行い、結果として外部資金の受入れ件数も増加しており、計画を上回って実施していると評価した。

（Ⅲ-2-(8)）産学連携共同実験棟の新設

産業界との研究交流を促進し、次世代の産業の芽を創出するため整備を推進した「産学連携共同実験棟」においては、平成19年2月の供用開始後、既に多くの企業と共同研究を実施しており、更なる地域貢献が期待できるため、計画を上回って実施していると評価した。

② 小項目評価がⅢ（順調に実施している）のうち、特に考慮すべき項目は次のとおり。

（Ⅲ-1-(1)）生涯学習交流センターによる県民の多彩な生涯学習ニーズへの対応
各部局の特色を生かした公開講座・国際セミナーのほか、17年度には身近でわかりやすいテーマを対象とした「知の創造シリーズ」フォーラムを新たに開催し、大学の教育機能の開放に努めており、計画を順調に実施していると評価した。今後は、ひょうご大学連携事業推進機構等関係機関との連携や効果的な情報発信により更なる充実を期待したい。

（Ⅲ-3-(1)）国際交流センターによる国際交流の推進

3県立大学の交流を引き継ぎ、兵庫県立大学として交流を推進している。また、16年度から、新たに国際交流相談員の巡回相談を行っているほか、平成18年6月には、今後の県立大学の国際交流の指針として「国際交流戦略」を策定しており、計画を順調に実施していると評価した。

③ 小項目評価がⅡ（計画を十分に実施できていない）の項目は次のとおり（主なもの）。

（Ⅲ-1-(4)）遠隔授業システムを活用した生涯学習の推進

生涯学習における遠隔授業システムの活用については、課題が多くハードルが高いものではあるが、具体的な検討が進んでいないことから、十分に実施できていないと評価した。

(Ⅲ-3-(7)) 日本人学生の海外留学の推進

受入れ留学生に比べて日本人の海外留学件数が著しく少ないことから、十分に実施できていないと評価した。

(2) 評価にあたっての意見、指摘等

- ① 県立大学が実績を有するのは社会貢献の分野であり、公立大学としての使命を発揮するために、生涯学習・産学連携・国際交流の分野を更に伸ばしていくことが望ましい。
- ② 知的財産については、機関帰属も大事であるが、特許収入の発明者への還元を充実させて教員のインセンティブを高めることも重要である。
- ③ 生涯学習について、県民の生涯学習に対するニーズは多様化しているので、そのニーズを的確に把握し、県民にとって有益な生涯学習を推進することを期待する。
- ④ 国際交流について、留学生・留学経験者を中核とした学生ネットワークを形成するとともに、積極的に日本人の海外留学を推進することを期待する。

3-4. 大学運営における自主性・自律性の確立

(1) 評価結果と判断理由

	評価の対象 項目数	I 実施してい ない	II 十分に実施で きていない	III 順調に実施 している	IV 上回って実 施している
1 責任ある大学運営 の戦略的・機動的推進	13	0	1	12	0
2 開かれた大学運営	7	0	1	6	0
3 教育研究・情報環境 の整備	6	0	1	5	0
4 大学生生活の安全・安 心の確保	7	0	1	6	0
5 柔軟で多様な教員 人事制度の構築	7	0	3	4	0
6 事務組織の機能の 強化	4	0	1	3	0
7 効率的な業務執行	6	0	4	2	0
8 地方独立行政法人 化の検討	3	0	0	3	0
合 計	53	0	12	41	0
		(0%)	(23%)	(77%)	(0%)

77%

○ 小項目評価の集計結果では、53項目のうちⅢ又はⅣは41項目であり、8割未満であることから、C評価（「やや遅れている」）であり、次ページの＜特筆すべき小項目評価＞に示すように、外部有識者を含む「運営協議会」を設置し社会の意見を大学運営に反映させているほか、教員の公募採用、新規採用助手への任期制導入など柔軟な人事制度の構築に努めていることは評価できるが、教員の人事評価システムやサバティカル制度の検討など十分に実施できていない項目も見受けられた。

○ 以上のことを総合的に考慮し、大項目評価としては、C評価（「やや遅れている」）が妥当であると判断した。

IV. 大学運営における自 主性・自律性の確立	S 特筆すべき 進捗状況	A 計画どおり	B おおむね 計画どおり	C やや遅れて いる	D 重大な改善 事項あり
----------------------------	--------------------	------------	--------------------	------------------	--------------------

<特筆すべき小項目評価>

- ① 小項目評価がⅢ（順調に実施している）のうち、特に考慮すべき項目は次のとおり。

（Ⅳ-1-(2)）運営協議会への産業界・学界等を代表する有識者の参画

大学経営に関する重要事項を審議する機関である運営協議会の学外有識者数が過半数を超えており、計画を順調に実施していると評価した。（⑩⑪⑫とも56%（9人/16人））

（Ⅳ-1-(10)）事務職員の専門性の向上、教員との連携

事務局職員が委員会の委員となるなど教員と事務職員が連携しており、計画どおりに実施しているものと評価した。

（Ⅳ-5-(1)）教員の公募採用

優秀な専任教員を確保するため、全部局において、教員採用は公募制を原則としており、計画を順調に実施していると評価した。

（Ⅳ-5-(2)）新規採用助手などへの任期制導入

社会変化に即応した教育・研究が柔軟に継続できる体制を確保するため、新規採用の全ての助手及び一部の附置研究所教員について任期制を導入しており、計画を順調に実施していると評価した。

（Ⅳ-8-(1)）法人化した他大学に対する調査、成果と課題の検証

法人化セミナーへの参加や新聞報道等を通じて、国立大学法人等の運営状況についての情報を入手しているほか、特色のある運営を行っている法人の実地調査を行っており、計画を順調に実施したものと評価した。

- ② 小項目評価がⅡ（計画を十分に実施できていない）の項目は次のとおり（主なもの）。

（Ⅳ-1-(12)）業務全体にわたる評価結果に基づく人員・予算配分の検討

評価結果に基づく人員・予算配分の仕組みは、調査段階であり、具体的な成果を得ていないことから、計画を十分に実施できていないと評価した。

（Ⅳ-5-(3)）教員の人事評価システムの検討

人事評価システムの先行事例を調査・情報収集し、これらをもとにシステムのあり方を検討しているが、今のところ大学全体としての人事評価システムは確立しておらず、計画を十分に実施できていないと評価した。

(IV-5-(4)) サバティカル制度等の検討

サバティカル制度や特定業務を重点的に取り組む教員配置制度については、調査段階であり、具体的な検討には至っていないため、計画を十分に実施できていないと評価した。

(2) 評価にあたっての意見、指摘等

- ① 運営協議会については、開催回数をより増やすことを期待する。
- ② 大学においては教職協働が重要であり、職員の意識改革及び専門性の向上のため、県と協力してSD (Staff Development) にも力を入れることが望まれる。今後は、現行の取組みに加え、大学事務経験のある職員の配置、研修の実施、会議への積極的な参画などにより職員のスキルアップを図り、教員と職員の一層の連携・協働に期待する。
- ③ 新規採用の助手への任期制導入は評価するが、他の教員についても任期制のあり方を検討することが望ましい。
- ④ 教員評価にあたっては、メリット・デメリットもあるが、教育・研究・社会貢献・学内業務等をバランスよく評価するシステムが望ましく、FDによる自律的な自己申告制度など早急なシステム構築の検討を期待する。
- ⑤ 企画立案、広報を一層戦略的に実施するため、必要な体制について検討することを期待する。
- ⑥ 法人化については、国立大学法人や公立大学法人の成果や課題を検証するとともに、県立大学の運営実態も踏まえながら、その適否を検討することを期待する。

3-5. 3大学統合によるメリットの発揮と課題の解消

(1) 評価結果と判断理由

	評価の対象 項目数	I 実施してい ない	II 十分に実施で きていない	III 順調に実施 している	IV 上回って実 施している
1 統合のメリットを 生かした教育・研究の 推進	4	0	0	4	0
2 学内学生交流の推 進と就職支援	4	0	2	2	0
3 教職員の意識啓発	3	0	0	3	0
4 後援会組織の連携 強化と充実等	3	0	2	1	0
合 計	14	0 (0%)	4 (29%)	10 (71%)	0 (0%)

71%

○ 小項目評価の集計結果では、14項目のうちⅢ又はⅣは10項目であり、8割未満であることから、C評価（「やや遅れている」）であり、次ページの＜特筆すべき小項目評価＞に示したように、兵庫情報ハイウェイを利用した遠隔授業システムの導入、学際的研究グループの形成による共同研究等の推進などは評価できるが、学生自治会や後援会・同窓会の全学的な体制づくりへの支援など十分に実施できていない項目も見受けられた。

○ 以上のことを総合的に考慮し、大項目評価としては、C評価（「やや遅れている」）が妥当であると判断した。

V. 3大学統合によるメリットの発揮と課題の解消	S 特筆すべき 進捗状況	A 計画どおり	B おおむね 計画どおり	C やや遅れて いる	D 重大な改善 事項あり
--------------------------	--------------------	------------	--------------------	------------------	--------------------

<特筆すべき小項目評価>

- ① 小項目評価がⅢ（順調に実施している）のうち、特に考慮すべき項目は次のとおり。

(V-1-(1)) 他キャンパスの多様な科目を受講できる遠隔授業システムの活用

兵庫情報ハイウェイ経由でキャンパス間を結び、最新の通信技術を取り入れた双方向遠隔授業システムを導入することで、全学生に教養科目や他専攻科目のほか教職課程科目など、多様な科目を提供しており、順調に実施していると評価した。

(V-1-(3)) 研究成果の共有と部局を超えた共同研究の推進

県立大学特別教育研究助成金による研究成果を学内で共有し、部局間の連携と教育・研究の活性化に資することを目的とした研究発表会を毎年開催しているほか、複数部局が参画するフォーラムの開催、海外研究者との研究交流など、共同研究を積極的に推進しており、順調に実施していると評価した。

- ② 小項目評価がⅡ（計画を十分に実施できていない）の項目は次のとおり（主なもの）。

(V-2-(1)) 学生自治会の全学的体制づくりへの支援

学生部長や各地区学生副部長が中心となり、各学生自治会等との調整を進めながら、体制づくりへの支援を行っているが、今のところ全学学生自治会はできておらず、計画を十分に実施できていないと評価した。

(V-4-(1)) 後援会・同窓会の全学的な合同体制づくりへの支援

後援会については、事務担当者等による協議を定期的実施するとともに、合同組織設立に向けた検討・調整を行っているが、同窓会については、開学後、合同の交流会を開催したが、今のところ合同組織の設立については具体化に至っておらず、計画を十分に実施できていないと評価した。

(2) 評価にあたっての意見、指摘等

- ① 統合の効果については、すぐに効果が現れないものもあるが、適切な資源と学生を含む人材の確保に努め、その効果を県民に対して明らかにするよう期待したい。
- ② 学生の一体感の醸成に資するためにも、東西両地区の学生自治会の統合等全学的体制づくりへの更なる支援を期待する。
- ③ 後援会、同窓会の全学的組織については、各学部の特徴や違いを踏まえつつ、引き続き検討することを期待する。

3-6. 大学情報の積極的な公開・提供及び広報の充実

(1) 評価結果と判断理由

	評価の対象 項目数	I 実施してい ない	II 十分に実施で きていない	III 順調に実施 している	IV 上回って実 施している
大学情報の積極的な公 開・提供及び広報の充実	4	0	1	3	0
		(0%)	(25%)	(75%)	(0%)

75%

- 小項目評価の集計結果では、4項目のうちⅢ又はⅣは3項目であり、8割未満であることから、C評価（「やや遅れている」）であり、下記の＜特筆すべき小項目評価＞に示すように、様々な媒体を用いて、積極的に広報活動を行っていることは評価できるが、各キャンパスの個性・特徴の明確化については、十分に実施できていなかった。
- 以上のことを総合的に考慮し、大項目評価としては、C評価（「やや遅れている」）が妥当であると判断した。

VI. 大学情報の積極的な 公開・提供及び広報の 充実	S 特筆すべき 進捗状況	A 計画どおり	B おおむね 計画どおり	C やや遅れて いる	D 重大な改善 事項あり
-----------------------------------	--------------------	------------	--------------------	------------------	--------------------

＜特筆すべき小項目評価＞

- ① 小項目評価がⅢ（順調に実施している）のうち、特に考慮すべき項目は次のとおり。

(VI-(1)) ホームページ等自主広報媒体によるPR、報道機関の活用による広報
広報委員会において、ホームページを重点的広報メディアと位置づけ、全学的なホームページのリニューアルを行うなど、同委員会が中心となって、広報展開を行っており、順調に実施していると評価した。

- ② 小項目評価がⅡ（計画を十分に実施できていない）の項目は次のとおり。

（Ⅵ-（2））各キャンパスの個性・特徴の明確化

新大学の学章を商標登録し、生協による大学グッズでのノベルティ化や、新たに学歌制定を図るなど、新県立大学のブランド化に努めているが、キャンパスごとの個性や特徴の明確化については今後取り組む必要があり、計画を十分には実施できていないと評価した。

（2）評価にあたっての意見、指摘等

- ① 教育の成果を誇り得る人間性豊かな大学、先導的・独創的な研究を行う個性豊かな大学、世界に開かれ、地域とともに発展する夢豊かな大学を目指す新県立大学の総合的なブランド力を高めるとともに、各キャンパスの歴史と沿革を踏まえた特色の明確化に意を用いることに期待する。
- ② 県立大学としてのアイデンティティを明確にし、戦略的に大学のイメージを発信することが望ましい。

(参考 - 1)

○兵庫県立大学評価委員会委員名簿

(五十音順、敬称略)

氏名	所属等
大南 正瑛 (委員長)	元立命館総長 京都橘学園特別顧問
西門 義博	兵庫県私学総連合会会長 (学)三田学園理事長
西川 京子	みすず監査法人・公認会計士
平松 一夫	関西学院大学学長
米田 徳夫	㈱ヤマトヤシキ代表取締役会長兼社長

(参考 - 2)

○委員会の開催経過

第1回兵庫県立大学評価委員会 (平成18年10月6日、兵庫県公館第2会議室)

【主な議事】

- ・兵庫県立大学評価委員会の運営について
- ・評価の基本的な考え方について (進め方、視点等)

兵庫県立大学評価委員会現地調査 (平成19年1月26日)

【調査先】

- ・神戸学園都市キャンパス
- ・姫路書写キャンパス

第2回兵庫県立大学評価委員会 (平成19年1月31日、兵庫県立大学本部中会議室)

【主な議事】

- ・中期計画の小項目評価について

第3回兵庫県立大学評価委員会 (平成19年3月14日、兵庫県公館第2会議室)

【主な議事】

- ・中期計画の大項目評価について
- ・中期計画の全体評価について